

○・ヘンリーの作品の季節

落ち葉の季節からクリスマスのシーズンへ。この時期に思い出されるのは○・ヘンリーの小説です。「最後の一葉」と「賢者の贈り物」——この二つは氏の多くの短編の中で、日本で最も読まれている作品でしょう。

私の作品との出会いは、高校時代の英語の教科書でした。短編であること、内容がわかり易く教訓的な面もあること、使用されている英語も比較的易しいこと、などから教材として最適だったのでしょうか。この文をお読みの皆様の中でも、どこかで原文の一端に触れた方も多いのではないのでしょうか。

「最後の一葉」(The Last Leaf)

——芸術家を目指す人々の集まるワシントンのある一角。ジョンジーは街で出会ったスーと共に、アパートに小さなアトリエを持っていた。彼女は肺炎に犯されていた。

「彼女を生かすのは、治療よりも、むしろ生きようとする意志なのだ」と医師が言う。しかし、ジョンジーは外にある木を見ながら、自分の死期ばかりを考えていた。

「あの木の最後の一葉が落ちたとき、自分は死ぬのだ」。スーは彼女のそんな姿を見て、どうしたらいいか困り果てていた。



アパートには、もう一人、偏屈な老人が住んでいた。

「いつか自分の傑作を作る」。それが口癖だった。そして、その夢をかなえることのないまま老人になってしまった。スーはジョンジーが肺炎で生きる希望を失っていることを老人に告げた。

冬を迎え、木からは一枚また一枚と葉が落ちていった。やがて、嵐が訪れた。嵐が過ぎた翌朝、ジョンジーは窓を開けた。木には、

最後の一葉だけが落ちずに残っていた。激しい嵐の中でも落ちなかった葉っぱを見て、彼女は再び生きる希望を持った。やがて、肺炎からも回復した。

同じころ、同じアパートのあの老人が肺炎で亡くなった。なんでも、あの嵐のなか、玄関にびしょ濡れでいたらしい。そう、最後の一葉は、煉瓦に描かれた一枚の絵だった。それは、老人の描いた最初で最後の傑作だったのだ。



・・・この短編で、作者は何を訴えようとしたのでしょうか。「自分の命と引き換えに若い命を救った」「本物の芸術のために自分の命をかけた」など、いろいろと解釈されるでしょうが、私は文中の医師の言葉に注意を引かれます。

——医者と言った。「わしの努力が及ぶ限り、あらゆる療法を施してみよう。しかしな、あの娘が自分の葬式の列での車の数を数え始めたら、医薬の効能がふつうの 5 割ぐらいになるとしてもらいたい。あんたが彼女に外套の袖のこの冬のニュースタイルについての質問をさせることができれば、十に一つだった可能性が五に一つになると約束しよう」

先の随筆やレポートで紹介した赤毛のアンのように、すべてを前向きに明るくとらえていく心こそが、病を治し、人生を開いていくカギだと思うのです。

「賢者の贈り物」(The Gift of the Magi)

——ある貧乏な若夫婦。クリスマスだというのに、お互いに贈り物をするお金すらない。でも、それぞれに素晴らしい宝物を持っていた。妻のデラは皆が褒め称える美しい髪を、夫のジムは誰もが羨む立派な金時計を・・・



二人はそれぞれに決断する。妻は夫の金時計にふさわしい鎖を買うために、大切な髪を売ってしまった。夫もまた、妻の美しい髪を梳く櫛を買うために、大切な金時計を売ってしまったのだ。

クリスマスの当日。二人がプレゼントしあったものは、結果的にお互いにとって役に立たないものとなってしまった。でもこれは、どんなものよりも、相手の胸に届く“心の贈り物”となった。



短い物語に込められた強く深いメッセージ。私の信奉する日蓮大聖人の御書(論文や弟子への手紙等をまとめた一書)でも次のように言っています。

「蔵の財よりも身の財すぐれたり。身の財より心の財第一なり」——財産や高価な物より健康な身体が第一。そして身体よりも心の宝こそが第一との意味。やはり、人の心を打つのは人の心なのです。